

# 『蘆刈』試論

——偽装の語りと〈水無瀬見聞記〉——

川 島 淳 史

はじめに

大正十二年九月一日、箱根で関東大震災に遭遇した谷崎は四日に沼津から大阪へ向い、ひとまず芦屋の伊藤甲子之助宅に避難した。その後、本郷西片町の今東光のもとに身を寄せていた家族を率いて、関西へと移住する。当初京都に居を構えたが、間もなく兵庫県六甲苦楽園万象館に移り、ここで『痴人の愛』を執筆し始めるのである。さらに武庫郡本山村北畑に転居するが、ここにも長くは居住せず、十五年十月に本山村岡本好文園に移り住む。この岡本では（梅ヶ谷移住後も含めて）四年半余の歳月を過ごすことになるのであるが、『蓼喰ふ蟲』『世』『吉野葛』といった佳篇はこの間に発表された。関西移住が谷崎の日本的美への覚醒となつて、昭和初年代の豊穡な季節を迎えるための契機となつたことは周知の通りであるが、一方で同時期のモダニズムの影響を多分に受けていることにも注目すべきで

あろう。『正』で試みた一人称語りVによる方法は多彩なヴァリエーションを生み出し、後の『春琴抄』や『閑書抄』といった重層的な構造を備えた作品群へと続いていくのである。

昭和七年の『改造』十一月号および十二月号に発表された『蘆刈』も、この一連の〈語りもの〉の中に位置している。翌年四月には創元社から五百部限定の自筆本を出しており、谷崎も後々まで『蘆刈』は自分としても愛着の多い作品の一つと述べているだけあって、かなりの自信作であったことが窺われよう。

従来この小説は、谷崎の松子夫人（当時は根津清太郎室）に対する思いのたけを綴った作品であるというような見方が強調されるきらいがあった。<sup>(2)</sup>確かに彼女が谷崎の創作意欲を高揚させる存在であったことは疑い得ないが、ここで改めて『蘆刈』を読み直すにあたっては、このテキストがいかに「かたり」の特性を活用し、虚構を構築しているかという点に注目していきたい。「かたり」とは「語り」であると同時に「騙り」でもある。それゆえに「かたり」という言語行為は「はなし」に比べて屈折を孕み、ときに、誤り・隠蔽・自己欺瞞などの可能性を内包しているのである。<sup>(3)</sup>この特質を知悉し実践したのが谷崎であって、そうした戦略的な語りが『吉野葛』や『春琴抄』などにも用いられているのだが、同様にこの『蘆刈』でも「かたり」による虚実の縋いませが行われており、物語事実が巧みに韜晦されてしまっている。ゆえに、その奥深くに潜む物語事実（以下〈事実〉と表記）のすべてを明らかにすることは非常に困難である。だが、テキストに散りばめられた数字や記号は、語りの深奥に隠されたもう一つの読みを我々に要請しているように思うのだ。本稿では特に「蘆間の男」の言説に注目し、その中に見られる文化記号や話法の分析を通して、その虚と実とを解きほぐしていきたいと思う。

従来『蘆刈』の論点となってきたのは、「蘆間の男」は何者かということである。この「男」をいかなる存在として捉えるかによって、この小説全体の読み方が大きく変わってくるであろう。また『蘆刈』を名作であるとする一方で、例の「たゞそよく」と風が草の葉をわたるばかりで汀にいちめん<sup>(6)</sup>に生えてゐたあしも見えずをとこの影もいつのまにか月のひかりに溶け入るやうにきえてしまつた」という結末に対しては否定的見解も少なからず見受けられる。例えば、佐藤春夫は「結末でだれてしまふといふ欠点は彼の力作には不思議と必ず伴ふ瑕瑾として僕は以前から指摘し、奇現象としてゐたが、名作『蘆刈』も遂にこの病に随してゐた」と述べており、小島政二郎も「結末まで読んで」な<sup>(4)</sup>アんだ、大人のお伽噺だったのかと思つたが、お伽噺にしても、馬鹿馬鹿しさがいつまでも消えなかつた」と批判を加えていて、谷崎の意図が十分に理解されている<sup>(5)</sup>とは言ひ難い。換言すれば、この結末をどう読むかによって、この小説の評価自体も違つたものになつてくるということであろう。そこでまず『蘆刈』の研究史を振り返つて、これまでの「男」をめぐる諸氏の見解を中心に確認していきたいと思う。

これまでの先行論文を見ると、その多くが『蘆刈』を夢幻譚として定義しているようである。例えば、岡崎義恵は「この葦の中の男は現実の人間とは見えず、幻影か幽霊めいたものであつて、この作はそのために全体怪譚のような感じのするものである」という印象を洩らして<sup>(6)</sup>おり、森安理文も「男」を「靈的(もののけ)存在」として捉えている<sup>(7)</sup>。同様に河野多恵子も「男」は「慎之助」の亡霊<sup>(8)</sup>であると見ており、永栄啓伸も「慎之助の亡霊が息子の姿を借り

てよみがえったの」だと解釈している。<sup>(9)</sup> また、三田村雅子もこの「語り手の男」を「幻想の人物」として捉え、『蘆刈』は、閉じられることのない、覚醒することのない幻想を、醒めてなおひきずる物語なの」だと定義した。<sup>(10)</sup>

右の諸氏とは些か異なった見解を示したのは、野口武彦である。野口は、「この男がお遊さまに恋着した父親の霊なのか、その息子であるのかは曖昧模糊としている」としながらも、「あるいはまた、同じように女人に執心しつづけるそれが語り手の『わたし』からあくがれ出た魂」ではあるまいかという読みを提示した。<sup>(11)</sup>

一方、お遊さんを非現実的な存在として見る研究者も多い。橋本芳一郎はお遊さんを「この世のものではなく、夢幻のかなた」の存在として捉えており、<sup>(12)</sup> 三瓶達司も『お遊さん』は過去の世界の「臆たけた夢幻界に住む」人であるとし、それゆえに「お遊さんも、それにかかわり合う人々も悠久の月のひかりの中に」「夢幻能的」に消えてしまうのだと論じている。<sup>(13)</sup> 同様に鶴田欣也も『蘆刈』の内部の構成が複式夢幻能に酷似している」と指摘し、「要するにこれは特殊空間というよりは、時間を数世紀逆行して、御殿女中の部屋を再現したもの」であり、「お遊さんは現代に生きていなくて、過去の幻の時代の人なの」だと論じた。<sup>(14)</sup> また、宮内淳子はその異界を構成する要素として「水」に着目し、『水の上の女』たるお遊さまは「現実の時の流れから離れた無時間の世界の人であり、父と息子が共通に恋し得る永遠の女性なの」だと解釈している。<sup>(15)</sup> さらに前田久徳は、「男の消失は彼の語り来たった世界を、一瞬のうちに、<sup>(16)</sup> 比喻ではなく、字義通りの〈まぼろし〉へと転化し、お遊さんをその世界へ封じ籠めたのである」とし、『芦刈』は谷崎に於けるあり得べき〈夢〉の世界を言葉通りの〈まぼろし〉として定着した作品である」と定義した。これらの諸説には、少なからず差異はあるものの、『蘆刈』を夢幻譚あるいは幻想文学のジャンルに属する作品として論じていると見てよいだろう。

これに対し、『蘆刈』を母恋い小説とする読みも提出されている。いち早くこの小説を母恋い小説として論じたのは秦恒平であった。秦は「男」を慎之助とお遊さんの子であると仮定し、『男』がお遊様の産んだ子でなければ、『蘆刈』は奇妙に寂しく物足りなく苛立たしい生煮えの作品になり終る。歴然とした谷崎母恋いの名作たる面目をどんよりした鈍雲のかけに隠してしまう。そして事実この輝く皓い月に似た美しい作品は、四十四年間もその無理解、誤読という厚い雲のかけであたら魅惑の光を放ち切れない不幸を嘆きつづけてきたのである」と述べ、『吉野葛』から『夢の浮橋』へと続く母性思慕の系譜の中に位置づけた。<sup>(17)</sup> これを受けて大里恭三郎は、「谷崎文学においては、読者は作中人物の言をそのまま鵜呑みにすることはできない。血の問題に関するかぎり、『蘆刈』は『春琴抄』よりも難解であったが、これは秦氏の分析通り、〈男〉はお遊さんの子と読むべきであろう」と秦説を強く支持した。ただし、「〈母恋い小説〉と見るよりも、真直ぐ『春琴抄』へとつながっていく〈恋物語〉系列の作品として位置づけられるべきだ」としている。<sup>(18)</sup>

一方、笠原伸夫は「〈男〉が肉体的には静子の子であり、精神的にはお遊様の子であったとしても、『蘆刈』のもつ危うい夢がそこなわれることにはなるまい」と述べ、秦説には異議を唱えつつも母性思慕というテーマが根幹に据えられていることには同意を示した。<sup>(19)</sup> また、たつみ都志は「父のお遊様への思慕という一元的な女性思慕譚ではなく、それを代弁する息子の母への屈折した母性思慕——女としての存在を極限まで純化した母性への思慕」も書かれていると見て、『蘆刈』を『源氏物語』や谷崎の『夢の浮橋』と同じような「継母思慕構造を持つ」作品であると論じている。<sup>(20)</sup>

秦の論はそれまでの『蘆刈』の制度的な読みに一石を投じたかたちになったが、些か論拠が曖昧で、論理の展開にも飛躍が多い。お遊さんを「男」の実母とする読みを定着させるためには、より丹念な検証が必要かと思われる。これらの議論を総括するかたちで、千葉俊二は次のように「解説」している。

が、お遊様への愛執をひととおり語り尽すと、忽然と姿を消すこの男は、一体何者だったのであろうか。自らは幾度も慎之助とお静との間に生まれた子であるというが、夢幻能の形式にしたがうならば、お遊様への妄執につかれた父親の霊であったかも知れず、また男が語り手と「同年輩」の「わたしの影法師」のような存在とされるところからは、野口武彦もいうように、同じように美しい女人の幻影に執心しつづける「語り手『わたし』」からあくがれ出た魂「『谷崎潤一郎論』」であったかも知れない。あるいは秦恒平の説くように「父『慎之助』」が『お遊様』に生ませた子「『お遊さま』——わが谷崎の『蘆刈』考」と見做す可能性も全くないわけではないが、もしそう読んでいいのなら、逆にこの男を、生なかたちでは語るに堪えられぬ自らの体験を男（子）の語りにおのれを隠しながら、隠すことによって辛じて語り得た、——しかもそうすることによっておのれのお遊様への思慕の性格をも十全に語ることできた慎之助その人と見做してもよいはずである。が、もちろんいずれとも決し難い。<sup>(21)</sup>

この千葉の「解説」は、まさしく『蘆刈』というテキストの多義性を象徴しているように思うのだが、だからと言ってすべての読みを是認してしまうことにも疑問が残る。『蘆刈』は確かに幻想文学的な要素を盛り込んだ作品であるが、単なる夢幻譚としてかたづけしてしまうのは適当ではあるまい。また、お遊さんを「男」の実母と見做す読み方を首肯することもできない。むしろ私は、千葉が最後に付け加えた解釈こそ、「男」が「語り」の奥に隠蔽した〈事実〉なのではないかと考えている。もちろん「男」が慎之助自身であることを証明するためにはそれなりの論拠が必要であるし、多くの問題点がある。そこで、以下「男」の語りの内容を検証しながら、『蘆刈』の内実について考えてみようと思う。

ここでは〈作者〉と記述者の「わたし」を区別する必要上、「わたし」が書いたものをかりに〈水無瀬見聞記〉と呼ぶことにしたい。まずこの〈水無瀬見聞記〉は淀川上流への道行から書き始められる。「まだをかもとに住んでゐたじぶんのあるとしの九月のことであつた」という書き出しのだが、この「ある年」とはいつたい何年のことなのか、また「わたし」がこれを書いている現在はいつなのか、これだけでは特定することができない。そこで手掛かりとなるのが次の記述である。

やまざきまでなら汽車で行つてもすぐだけれども阪急で行つて新京阪にのりかへればなほ訳はない。

この「新京阪」というのは新京阪電鉄線のことで昭和三年十一月一日に京都西院と大阪間に開通している。<sup>(22)</sup>したがつて、「わたし」が山崎へ出掛けたのは翌昭和四年以降の九月と考えてよい。そしてさらに次のような一節がある。

げんざいではその江口も大大阪の市内にはひり山崎も去年の京都市の拡張以来大都會の一部にへんにふされたけれども（以下略）

この記述によれば、「わたし」が書いている「げんざい」というのは、山崎が京都市に取り込まれた翌年ということになる。京都市に伏見市ほか二十六町村が編入され、それまでの市・区の境界を変更し、右京区・伏見区を設置したのが昭和六年四月一日のことであるから、「わたし」が書いている「げんざい」とは昭和七年と考えてよい。<sup>(24)</sup> (すでにこの点については塩崎文雄の論考にも指摘がある。)<sup>(25)</sup> さらにまた、「げんざいでは」山崎も京都市の「一部にへんにふ」されたというこの記述は、「わたし」が水無瀬散策に出掛けた時点ではまだ編入されていなかったということにもなる。とすれば、「わたし」と「男」が出会ったのは昭和四年か五年のいずれかということになるだろう。

水無瀬に辿り着いた「わたし」がいにしえの遊女のことを思い浮かべながら一人感興を催している時、「葦のあひだに、ちやうどわたしの影法師のやうにうづくまつてゐる男」が現れ、やがて父親から子どもの頃に聞かされたという話を語り始める。この「男」は「わたしと同年輩ぐらゐ」ということだから、五十歳前後と考えてよいだろう。それは「男」自身の話からも裏付けられる。

さあ、はじめてつれて行かれましたときは七つか八つでござりましたからなにもわかりませなんだけれどもわたしの父は路次のおくの小さな家に住んでをりまして母は二三年まへに死去いたし親子二人ぎりでくらしををりましたのでわたくしをおいて出あるくことが出来なんだのもござりませう、なんでもわたくしは、坊よ、月見につれて行つてやらうといはれて明るいうちから家を出ましてまだ電車のない時分でござりましたから八軒屋から蒸汽船に乗つて此の川すぢをさかのぼつたことをおぼえてをります、



ここで「男」は「七つか八つ」の時に遊さんを初めて見たと語っており、また「なにしろ今から四十何年の昔のことですごく言ってます」と言うのだから、「男」が五十歳前後であろうという「わたし」の見立ては間違っていない。そして「男」が父に連れられて初めてお遊さんのところへ行ったのは京都・大阪間に「まだ電車のない時分」あり、「八軒屋から蒸気船に乗つた」という。京都電気鉄道が大阪天満橋と京都五条大橋間の営業を開始したのは明治四十三年四月のことであり、「男」が語っている時点から「四十何年の昔」に電車が運行しているはずがない。「わたし」と「男」が出会った時（「わたし」の水無瀬散策の年がどちらかは決定することはできないのだが、ここでは昭和四年九月と措定して年立てを考へてみることにする<sup>(26)</sup>）を起点として考へるならば、四十数年前というのは明治二十年頃あたり、江崎権兵衛の淀川汽船会社がようやく営業を開始した時期である。淀川における汽船の歴史は古く、明治元年に大阪の綿屋吉郎兵衛が大阪・伏見間に就航させた「川蒸気」が初めともされているが、明治二年十一月に新政府が「淀川通船規則」を制定した翌年以降、頻りに淀川を往来し始めたらしい。しかし、明治九年二月に京都府・大阪府は「京摂間諸川通船規則」を制定し、夜間の航行を禁止した。淀川の夜間航行が許されるのは明治十八年であるから、当然それ以降であり、その翌々年五月十八日に設立された淀川汽船を利用した可能性が高い<sup>(27)</sup>。とすれば、「四十何年の昔」というのは京阪電車が走り始める頃よりもはるか以前、夜間の汽船が通い始めた時分にあたるのだ。

さらに「男」が覗き見た邸内の情景の説明にも注目したい。

座敷の中にはまだその時分は電燈が来てゐなかつたものかそれとも風情をそへるためにわざとさうしてありましたものか燭台の灯がともつてゐて（以下略）

京都市中に初めて電灯が灯されたのは明治十六年四月のことであるが、二十年代初めの頃は養沢品の部類であり、需要者も主として祇園を中心とした料亭などに限られていた。当然、明治二十年前後はようやく京都でも電灯会社設立の動きが見え出した頃であり、府下の地域への供給などはまだ考えもしない段階であつただろう。やがて電灯の需要が拡大し、明治三十九年十月二十五日に宇治川電気株式会社設立され、四十一年十二月には宇治水力発電所の建設が進められている。そうした周辺の動向を受けて、四十三年二月二十八日には紀伊郡伏見町の安良藤吉・久世郡宇治町の岩井勘造ら十一名が宇治電灯株式会社設立を出願しており、この付近にもようやく電気が供給されることになるのである。宇治川水力発電所が完成したのは大正二年七月三十一日のことであるから、巨椋池界限に電灯が引かれたのは当然その後のことになる。宇治川電気は京都電灯に電力を供給し、京都電灯が巨椋池にも電灯を引いたのは大正二、三年のことであり、宇治町が宇治川電気からの受電によって町営電気供給事業を開業するのは大正二年十一月のことであつた。<sup>(28)</sup>つまり、「今」から「四十何年前の昔」に巨椋池付近に電灯が来ているはずはなく、二十五、六年後によろやく電灯が引かれたのである。<sup>(29)</sup>お遊さんのところへ毎年一度は垣間見に行っている「男」が、「今」までこのことを知らないままではいたはずがない。

ところで彌川が亡くなりお遊さんが未亡人となつたのは「明治初年のこと」だと「男」は言うのだが、それが何年のことなのかを知る手掛かりは全く語られていない。この点について塩崎は、「芹橋が男を毎年のように巨椋池に伴い、お遊さんの物語を物語るのが一八八九（明22）年ごろのことであり、お遊さんと芹橋との濃密な交渉の時期が一八七七（明10）年前後の数年間であつたとして計算すれば、「お遊さんが先夫を失つて『若後家』になつたのは、かろうじて『明治初年』<sup>(30)</sup>ということになる」としている。この塩崎の解釈は、「明治初年」と「男」が初めてお遊さんのこと

るへ行った年との時間的な矛盾を解消しようとしたものであるが、「明治初年」の範囲を拡大し、お遊さんと芹橋との出会いを明治十年と仮定した年立てにはやや無理があるように思われる。むしろ、この「明治初年」という言葉こそ、疑ってみる必要があるのではないだろうか。ここで「男」はお遊さんが再婚しなかった理由を「明治初年の」「旧幕時代の習慣が残つて」いたためと説明しているが、女性の再婚を厭う因習的な意識は決して「明治初年」だけのものではなく、その後も根強く残り続けていたと思われる。殊に代々続いてきた小貴族的な富裕な商家であれば、なおさらであろう。この「明治初年のこと」という「男」の説明には、その時代状況の手掛かりとなるものが何も示されていないのだ。

これまでのことを整理すると次のようになる。ただし、不審な点には？を付しておいた。

明治初年（？）

明治十八年（一八八五）七月二日

明治二十年（一八八七）五月十八日

明治四十三年（一九一〇）四月十五日

大正二年（一九一三）七月三十一日

昭和三年（一九二八）十一月一日

昭和四年（一九二九）九月

昭和六年（一九三一）四月一日

昭和七年（一九三二）

慎之助、お遊さんを知る？（お遊さん、数え年二十三、四歳？）

京都府、船灯監査規則を制定

株式会社淀川汽船会社が営業開始（この頃「男」は初めてお遊さんを見る？）

京阪電気鉄道が営業開始

宇治川発電所が完成、京都電燈が巨椋池界限に電灯を引く

新京阪が全線開通する

「まだをかもとに住んでゐたじぶん」（「わたし」が「男」の物語を聴く）

「京都市の拡張」が行われる

「わたし」が書いている「げんざい」

この年立てから気がつくのは、「男」の語りの中に「汽船」「電車」「電燈」などといった文化記号が使われていることである。ところが、大変動期であった明治初年頃の社会・風俗を示す文化記号はほとんど見あたらないのだ。「汽船」は明治初年からあったものだが、これは例の京阪電車が敷設された後も営業していたのだから、ある限定された期間を示す文化記号とはならない。また「電車」の営業や「電燈」の普及は明治末期から大正初期以降であって、お遊さんを初めて見た時期からは二十年以上経ってからのことなのだ。それでは、これらの文化記号は何を意味しているのだろうか。

## 三

ところで「男」の説明によれば、お遊さんが「粥川といふ家へ器量のぞみで貰はれて行」ったのは「十七のとし」で、「二十二三のとしにはもう若後家になつてゐた」と言う。「男」の父がお遊さんと出会ったのは、「お遊さんが二十三」で「父が二十八歳」の時だったというのだから、お遊さんが未亡人になって間もない頃だったのだろう。やがて「お遊さんが二十七のとしに亡くなつた夫のわすれがたみの一といふ児が」病死し、「それから一年ほどた」って「宮津といふ伏見の造り酒屋の主人」と再婚したらしい。その後「男」の父はおしづに「いひしれぬあはれをもよほし」て契りを結び、そして生まれたのが自分であるというのだ。

このように父からの伝聞による話とは思えないほどに、「男」の説明は父とお遊さんの年齢に厳密である。したがって、「明治初年」に未亡人となっていたお遊さんが「いま」では「八十ちかいとしより」になっているはずだという

「わたし」の疑問は当然であろう。ところが、「男」はこれほど詳しく年齢を説明しておきながら、「わたし」の質問には答えずに立ち去ってしまう。なぜ「男」は答えを避けたのか——おそらく、「男」には現在のお遊さんの年齢については聞かれない理由があったからに違いない。

そこで昭和四年の時点でのお遊さんと「男」の年齢を推定してみたい。前述したように「男」は「七つか八つ」（満年齢六、七歳）であった。「四十何年の昔」に初めて巨椋池のお遊さんのところへ行つたというのだから、明治二十年頃であつたということになる。かりに明治二十年の秋として計算すれば、「男」が生まれたのは十三、四年となり、父とおしづが契つたのは十二、三年となる。そこで明治十二年に二十八歳でお遊さんが再婚し、父とおしづが本当の夫婦になつたとすれば、昭和四年の時点でお遊さんは七十八歳（満年齢七十七歳）になるはずだ。「男」が生まれた年を翌十三年と考えれば、「いま」は五十歳（満年齢四十九歳）という計算になる。したがって、父とお遊さんが出会つたのは明治七年ということになり、「明治初年」の範囲に入るだろう。だから、「わたし」の質問に対して「男」が肯定すれば、これまでの瑣末な疑問も雲散霧消してしまうのであるが、なぜか「男」は答えを避けてしまっているのだ。そして、さらに気になる一節がある。

大体さういふ童顔の人は所帯やつれさへしななければわりあひに若々しさを失はないものでござりますがお遊さんは十六七の時から四十六七になりますまで少しも輪郭に変わりがなくていつみても娘々したうひくしいかほをしてゐた人だと叔母なども始終さう申してをりました。

この叔母——父慎之助の妹は、お遊さんが二十八歳で再婚した後もしばしばお遊さんのもとへ訪ねていたのだろうか。また、「十六七」という年齢はともかく、「四十六七」という具体的な年齢は何を意味しているのだろうか。この点について永栄啓伸は、「文脈からすれば、当然、その年齢をすぎてからは容色が衰えたことが暗示されている。すなわち、父慎之助にとっても、お遊の〈蘭たけた〉美はそこに上限を持つ。慎之助の美意識はその上限を超えることを許さなかったであろうから、そこには自ずと、お遊の〈死〉さえ暗示されるのである」と解釈しているのだが、果してそうだろうか。もしお遊さんの容色が衰えているのならば、もはや「男」は巨椋池の別荘にまで足を運ぶことはあるまい。また、一般的に「四十半ば」「五十前後」ということはあっても、「四十六七」という具体的な年齢をあげているのはあまりにも不自然である。また、永栄は「お遊さんの〈死〉」というもう一つの可能性を提示しているが、すでにお遊さんが死んでいるならば（亡霊に会いに行くのでなければ）もはや出掛ける理由はなくなる。この「四十六七」という年齢にも何か別の意味が隠されているように思われる。

そこで再び淀川・巨椋池周辺の時代状況と照合して考察してみたい。繰り返しになるが、「まだ電車のない時分」と汽船の夜航が再開されたばかりの明治二十年頃とは、時間的に大きな懸隔がある。また「まだその時分は電燈が来てゐなかつたものか」という表現も、明治末頃ならばともかく、明治二十年前後の時代状況とはあまりにもかけ離れすぎてゐる。先ほど「男」が初めてお遊さんのところへ行ったと仮定した明治二十年と巨椋池界限に電燈が引かれた大正二年とは、実に二十六年もの開きがあるのだ。

では逆に文化記号を手掛かりとして考えてみればどうか。「男」が初めて行った時には京阪電車がなく、汽船を利用したというのだから、明治四十三年より前、四十二年までのことと考えられる。その頃電燈が来ていたか来ていない

か分からないという「男」の曖昧な言説から、最も時間的懸隔が少ない明治四十二年を「男」が初めてお遊さんのところへ行った年と仮定すればどうなるか。当然、「いま」五十歳前後の「男」がその時七、八歳であるはずがなく、昭和四年の二十年前だから明治四十二年の時点では三十歳前後ということになる。

この「男」は毎年巨椋池の別荘まで垣間見に出掛けており、今夜もこれから行くところだと言うのだから、「男」は（「いま」を昭和四年とすれば）前年の昭和三年までのお遊さんの姿を見ているはずである。この昭和三年の時点でお遊さんが「八十ちかい」年齢ではなく「四十六七」歳であったと仮定すれば、十九年前の明治四十二年は二十八歳、この年齢はお遊さんが巨椋池の別荘に住まわせられた年齢と一致する。とすれば、お遊さんより五つ年上でお遊さんが再婚した時に三十三歳であった慎之助は、「わたし」に語っている時点では五十三歳（満年齢五十一、二歳）であり、やはりこの「男」の年頃と合致するのだ。思うに、「男」が最後の「わたし」の質問に応じなかったのは、それまでのウソが露呈してしまうことをおそれたからではないだろうか。彼は、千葉が言うように「生なかたちでは語るに堪えられぬ自らの体験を男（子）の語りにおのれを隠しながら、隠すことによって辛じて語り得た」のであり、「四十年の昔」「明治初年」という言葉は、聞き手を欺くための虚構の設定にほかならなかったであろう。

#### 四

このように「男」は自らの過去を直接語ることを避け、父親の過去の出来事として物語を構築した。そしてその周到な時代設定は、〈事実〉を巧妙に隠蔽してしまっていると言える。だが、それが虚構であることは、その見事なまで

の語り口が凶らずも暴露してしまっているのである。

しかしあんさんがわたしをおもらひなされたのは私のあねときやうだいになりたかつたからでござりませう、姉はあんさんの妹さんからそんなはなしをきいてをりましたので私もしようちしてをりました、あんさんはずるぶん今日までよいえんだんがありながらどれもお気にめさなんだとやらではござりませぬか、そんなにむづかしいお方がわたしのやうなふつゝかなものを貰つてくださいましたのはあの姉があるゆゑでござりませうといひますので（以下略）

またあるときはさう顔を見んとおいてほしい、両手をついて首をたれたまゝかしまつてゐてほしいといひましたり、笑はんとゐてごらんといつてあごの下や横腹をこそばゆがらせたり痛いといふことを口にしてはならぬといつてごゝかしこを抓りましたりそんないたづらをしますのがいたつて好きなのでござりましてわたしはねむつてもあんさんはねむつたらあかん、ねむくなつたらじつとわたしの寝顔をながめてしんばうしてゐるがよいといひながら自分はすやくとまどろんでしまひますので（以下略）

「男」の叙述はほとんど父親からの伝聞——彼自身はその時のお遊さんやおしづの〈声〉を聴いていない——であるにも関わらず、間接話法ではなく直接話法によつて語られている。物心がつく前に亡くした母や遠くから垣間見ているだけのお遊さんの口調・抑揚・雰囲気などを、なぜ「男」は再現できたのであろうか。——それはやはり、この



「男」がおしづやお遊さんの〈声〉を直接に聞いた慎之助本人にほかならないからであろう。彼は自己の直接的な体験を間接的なものに変えて語ろうとしたものの、しばしばその設定を忘れ、いつしかお遊さんやおしづと直接対話した時の記憶を蘇らせたのに違いない。引用文中にあるお遊さんやおしづの「あんさん」という呼びかけは、慎之助であるこの「男」に向かって発せられた言葉だったのである。とすれば、「男」が慎之助のことを名前では一度も呼ばずに「父」という呼称を用い、おしづのことを「母」とは呼ばずに呼び捨てにしていた意味も理解できる。「男」は「わたし」と言うべきところを「父」に変え、妻であったおしづのことはそのまま名前を使うことによって、偽装の語り を無理のないものに仕組んでいたのである。したがって、次に引用した「男」の言説も理解することができよう。

さういふ風におしづはとかく粹をきかせて先ばしりをするくせがあるのでござりまして元来が苦勞性なのでござりませうか若い時分から取りもちの上手な老妓のやうなところがあつたのでござりますが考へてみればお遊さんに身も心もさへげられるために生れて来たやうな女でござりましてわたしは姉さんの世話をやかせてもらふのが此の世の中でいちばんたのしい、どうしてさういふ氣になるのだから姉さんの貞を見ると自分のことなどはわすれてしまふといふのでござりました。

これは伝聞による叙法でもなく、客観的に父の内面に焦点化して語っているのでもない。この批評は「男」自身のおしづ「観」にほかならないであろう。つまり、「母」としては相対化し得ぬはずのおしづをこのように相対化し得ているのは、「男」が彼女を一人の「女」として見てきたという証拠でもある。この部分で「男」は図らずも自身が慎之

助であることを露呈してしまっているのである。

また、この「男」がいかにかに父に聞かされた話であると言い張つても、その詳細すぎる語りに対して、聞き手の「わたし」も不審に思っていたはずだ。だが、そうした疑念を「男」は巧妙な語り口によつて韜晦し、〈事実〉を隠蔽しようとする。例えば、「男」は「尤もかういふ風に申しますとそんなをさない時分のことを非常にくはしくおぼえてゐるやうでござりますがじつは先刻も申し上げましたやうなしないでそのことではないのでござります」と語り、さらに「わたくしはまだ父のいふことがじぶんには会得できませんだがそれでも子供は好奇心が強うござりますし父の熱心にうごかされて一生懸命に聴かうく」といたしましたのでなんとなく気分がたはつてまゐりましておぼろげにわかつたやうなかんじがしたのでござります」と説明して、あらかじめ聞き手が抱くであろう疑念を封じ込めてしまつているのである。<sup>(32)</sup>

このように「男」は自分のあまりにも詳細にすぎる語りに対して、聞き手の「わたし」が不審を抱かぬように弁疏を繰り返している。それでも聞き手の「わたし」は「男」の記憶力のよさに不審を抱き、「あなたがお父上にそのじゆばんを見せておもらひになつた時はもうよほど成人してをられたのでせうね」「さうでなければ少年のあたまでさういふことを理解されるのはむづかしからうとおもひますが」と遂に疑念を露にする。それに対して「男」は「いゝえ、まだその時分やうく十ぐらゐだつたのでござりまして父はわたくしを子供とみとめずにはなしたのでござります、さればそのときはもちろん理解いたしませなんだが言葉どほりに記憶いたしてをりましてふんべつがつかますにしたがつてだんくとその意味を解いてまるつたのでござります」と弁明し、「わたし」の疑念を巧みに逸してしまつているのである。だが、「わたし」が発した最後の質問だけは「男」も躲しようがなく、蘆間の中に消えるしかなかつたの

であろう。

## 五

さて、ここまで「蘆間の男」が慎之助自身であったという読みを立証するかたちで論を展開してきたが、実はこれは一つの前提があつてはじめて成立する読みなのである。その前提とは、記述者の「わたし」が確かに「男」と出会つてその物語を聞き、「男」の言葉を誤ることなく忠実に筆記したものだという前提である。よつて、もしこの物語がすべて「わたし」の空想であつたり、「男」の話した内容を書き換えていたりしたと見るならば、当然別の解釈が生まれ得ることになる。

そこで問題となるのは、この〈水無瀬見聞記〉の記述者である「わたし」が、これを書いている時点で「男」のウソに気がついているかどうかということだ。「わたし」は「男」が語っている間、ほとんど無言で聞いているのだが、それでも「男」に対していくつかの質問を試みている。まず「男」の年齢に対する不審を問ひだし、それに続けて「なるほど、ではうかがひますけれどもお遊さんとお父上とのくわんけいが仰つしやるとほりであつたとするとあなたは誰の子なのです」と追及していく。それに対して「男」はすぐには答えず、語り終えるにあつて「左様々々、その母と申しますのはおしづのことでござりましてわたくしはおしづの生んだ子なのでござります」と答えるのだ。この点について秦は、「こゝ明らかに事を立てて言うからは、すでに『お静の子』と断言されていたむしろその裏を聴かせ読ませようという」意図があるはずだと指摘している。<sup>(34)</sup>確かに「男」の実母は誰なのかと改めて問い直しているの

は不自然であると言えなくもない。

さらに結末部分の「ですがあなたはそのうちも毎年あそこへ月見に行かれると仰つしやつたやうでしたね、げんに今夜も行く途中だと云はれたやうにおぼえてゐますが」という質問と「でもうお遊さんは八十ちかいとしよりではないでせうか」という質問の意味を考える必要があるだろう。「男」は前の質問に対し、「左様でございます、今夜もこれから出かけるところでございます、いまでも十五夜の晩にその別荘のうらの方へまゐりまして生垣のあひだからのぞいてみますとお遊さんが琴をひいて腰元に舞ひをまはせてゐるのでござります」と答えるのだが、その後の質問に対しては答えることなくこの場を立ち去つてしまふのである。

すでに述べたように「男」は「八十ちかいとしより」のお遊さんを見に行くのではなく、まだ十分に美しいお遊さんを見に行くのである。だが、それは延々と話し続けてきたこれまでのウソを暴露してしまふ結果になる。答えに窮した「男」は逃げるしかなかったのである。

この最後の質問は凶らずも「男」のウソの急所を突いたかたちになったが、実はここに書き込まれているすべての質問が「男」の隠している〈事実〉への手掛かりとなるものである。まず「男」の年齢に対する不審、次におしづと「男」の関係に対する不審、そしてお遊さんの年齢に対する不審というように、いずれも「男」の欺瞞を突いている。「男」は巧みに父親から聞いた話として語ってきたのだが、最後の質問だけは誤魔化しようがなかったのだ。否定すればウソがばれてしまい、肯定すれば美しいお遊さんの物語が興醒めになるからである。

「男」の語りを聞いた時点で「わたし」がそのウソを看破したかどうかは不明である。だが、この〈水無瀬見聞記〉を書いている昭和七年の「げんざい」においては、「わたし」は「男」の語りの詐術に気がついていることは間違いな

い。それゆえに自分の質問も「男」の虚構で覆われた物語の核心を読み取るための鍵となるものだけを〈読者〉に提示しているであろう。そして、何よりも「君なくてあしかりけりと思ふにもいと難波のうらはすみうき」という冒頭に掲げられた和歌が、嘗て愛した美しい女性への思慕を抱き続ける落魄した男の物語であることを暗示しているように思うのだ。さらにそれは『蘆刈』という題名を付けた〈作者〉のレベルにおける問題でもあるのだが、このことは別の機会を得て論じたい。

### おわりに

石原千秋はその著書『漱石の記号学』の中で田山花袋の『蒲団』を例として取り上げ、「小説テキストの前で、読者は無限の解釈ゲームを生きななければならない」ということを述べているが、殊に谷崎のテキストにはそうした解釈ゲームの要素がふんだんに取り入れられていると言ってよい。本稿で分析を試みた『蘆刈』もまた、その要素が取り入れられたテキストなのである（さらにこの後の『春琴抄』『鍵』『夢の浮橋』などにおいてその創作態度はより濃厚に打ち出されているであろう）。ゆえに、この『蘆刈』論もまた最終的な解釈とはならない。ここでは、おそらくあらかじめ用意されていた複数の解釈の中の一つを提示したにすぎないのであって、従来の解釈をすべて否定し得るものではないのだ。

『蘆刈』のような重層的な構造を備えた語りのテキストでは、その〈事実〉の全貌を明らかにすることは不可能である。それというのも「男」・「わたし」・〈作者〉のどのレベルにおいてどれだけの〈事実〉を語っているかは不明で

あり、あるいは「男」が〈事実〉を語っていたとしても、記述者の「わたし」が改竄していないとも限らない。あるいは「男」など初めから存在せず、「わたし」がすべて創作した物語であるかもしれないのだ。ここで試みた読みの前提というものを突き崩せば、右のような解釈も提示できるであろう。無責任なようだが、ここに提示した解釈も十全なものではないのだ。

さらに、虚実が錯綜するテキストの中での言説を信じ、どこに力点を置くかによってその解釈は大きく変わってくる。したがって、いかに説得力と論理性を兼ね備えた解釈を提出しても、それは結局〈解釈共同体〉の中での有力な一つの説に止まらざるを得ない。とすれば、これまで多くの〈読者〉が支持してきたであろう〈お遊様への父子二代にわたる恋慕の物語〉という読みもまた、一つの可能性にすぎないことになる。言い換えれば、『蘆刈』は我々がある前提のもとに自明のこととして読んできたあらゆる言説を脱構築してしまうテキストなのである。このように考えるならば、従来のすべての読みは無効であり、そこにはもはや積極的な読みなど提起することはできないのだらう。おそらく、谷崎のテキストはそうした恐ろしさを内包している。つまり、ここで論じた内容も徒労でしかないとも言えるのだ。近年の谷崎研究の停滞の一因はここにある。

だが、本来谷崎のテキストの魅力というのは、さまざまな解釈の可能性を秘めていることにはあつたのではないだろうか。〈事実〉が臙化されているということは、裏返せば〈読者〉一人ひとりがテキストから自分なりの解釈を引き出せるということでもある。そして、そこに私的解釈の強度を競う面白さが生まれてくるのだ。そもそも、作者の谷崎自身が何よりもそうした読書の面白さを追求し続けた一人ではなかったか。芥川龍之介との論争で谷崎が主張したのは、何よりも筋の面白さということであつた。彼はそこに小説の価値を見出し、この論争以降、より〈読者〉の参入

を求める形式のリドリリング・ストーリーを書き続けていくのである。このテキストから最終的な解釈を導き出すことは不可能ではあるが、能うかぎり細部にあたり、より確実性のある解釈を求めることは決して無意味ではあるまい。そう考えれば、ここで試みた解釈も必ずしも徒労ではないのであろう。本稿が以後『蘆刈』を論じるにあたっての問題提起ともなれば、と考えている。

## 注

- (1) 『お遊さま』を見て」(昭26・6「毎日新聞」)
- (2) 後年谷崎が『雪後庵夜話』(昭38・6、9、39・1「中央公論」)の中に「M子との結婚を発表する以前、人目を避けつゝ、こつそり逢つてゐた頃から、——いや、それ以前、根津家に出入して根津夫人としての彼女と交際を許されてゐた頃から、既に私の書くものは少しづつ彼女の影響下にあつたに違ひなく、『盲目物語』や『武州公秘話』などにその兆しが見える。(中略)だが明瞭に彼女を頭の中に置いて書いたのは『蘆刈』であつた」と当時の創作事情をあらわしていることや彼の松子宛書簡——「目下私は先月号よりのつゞきの改造の小説『蘆刈』といふものを書いてをりますがこれは筋は全くちがひますけれども女主人公の人物は勿体なうございませうが御寮人様のやうな御方を頭に入れて書いてゐるのでござります」(谷崎松子『倚松庵の夢』昭42・7、中央公論社)——が公表されたことなどによって、谷崎の実生活と結び付けて論じたものが多く見られる。
- (3) 坂部恵はその著書『かたり』(平2・11、弘文堂)の中で「へはなす」が、素朴な、しばしば内容の真偽や話者の意図の誠実不誠実に無記な行為であるのにひきくらべて、「かたる」が、すでに、意識の屈折をはらみ、誤り、隠蔽、欺瞞さらには自己欺瞞にさえ通じる可能性をそのうちにはらんだ、複雑で、また意識的な統合の度合の高い、ひとレベル上の言語行為であることを示すものとみなすことができる」と述べている。
- (4) 佐藤春夫「最近の谷崎潤一郎を論ず——『春琴抄』を中心として——」(昭9・1「文芸春秋」)、『定本佐藤春夫全集 第

二十卷』(平11・1、臨川書店) 所収

- (5) 小島政二郎『聖体拝受』(昭44・11、新潮社)
- (6) 岡崎義恵『近代日本の小説』(昭34・6、宝文館)
- (7) 森安理文『谷崎潤一郎 あそびの文学』(昭58・4、国書刊行会)
- (8) 河野多恵子「解説」(昭60・9、中公文庫『蘆刈・卍』)
- (9) 永栄啓伸『蘆刈』論——その構造と内実——(平1・10「日本近代文学」、『谷崎潤一郎 伏流する物語』(平4・6、双文社出版) 所収)
- (10) 三田村雅子「二股道の果て——『吉野葛』の旅から『蘆刈』『夢の浮橋』へ——」(昭63・5『日本の文学』)
- (11) 野口武彦『谷崎潤一郎論』(昭48・8、中央公論社)
- (12) 橋本芳一郎『増訂版』谷崎潤一郎の文学』(昭51・9、桜楓社)
- (13) 三瓶達司『近代文学の典拠 鏡花と潤一郎』(昭49・12、笠間書院)
- (14) 鶴田欣也『日本近代文学における「向う側」——母なるもの性なるもの——』(昭61・8、明治書院)
- (15) 宮内淳子『谷崎潤一郎「蘆刈」「夢の浮橋」など——動かない水の周辺——』(昭63・3「相模女子大学紀要」、『谷崎潤一郎——異郷往還——』(平3・1、国書刊行会) 所収)
- (16) 前田久徳『蘆刈』(平4・2「解釈と鑑賞」)
- (17) 秦恒平「お遊さま——わが谷崎の『蘆刈』考」(昭51・7「海」、『谷崎潤一郎』(平1・1、筑摩書房) 所収)
- (18) 大里恭三郎「谷崎潤一郎『蘆刈』論——絶妙な話術」(昭58・12「常葉短期大学紀要」、『谷崎潤一郎——『春琴抄』考——』(平5・3、審美社) 所収)
- (19) 笠原伸夫『谷崎潤一郎——宿命のエロス』(昭55・6、冬樹社)
- (20) たつみ都志「継母思慕構造としての『蘆刈』」(昭57・6「昭和文学」、『谷崎潤一郎・「関西」の衝撃』(平4・11、和泉書院) 所収)
- (21) 千葉俊二「解説」(昭61・6、岩波文庫『吉野葛・蘆刈』)
- (22) 京都府立総合資料館編『京都府百年の年表7 建設・交通・通信編』(昭45・3、京都府) に拠る。



- (23) 京都市編『史料京都の歴史 第十六巻 伏見区』(平3・1、平凡社)、京都府立総合資料館編『京都府百年の年表1 政治・行政編』(昭46・3、京都府)に拠る。
- (24) 言うまでもなく、「わたし」がこの(水無瀬見聞記)を書いている昭和七年という設定は、谷崎が『蘆刈』を執筆している年である。
- (25) 塩崎文雄『蘆刈』余影』(平4・12)
- (26) 震災後、谷崎が関西へ移住し、昭和初頭には岡本に住んでいたことは冒頭で述べたが、彼は昭和六年に岡本の家を売却している。その前年八月の時点で谷崎は千代夫人と離婚し佐藤春夫に譲るといふ旨の挨拶状を知人に送って話題の渦中にあり(所謂「細君譲渡事件」)、翌九月には世間の好奇心な目を避けるために北陸に旅行している。かりに「わたし」を現実の作者谷崎と同定すれば、「新京阪」を利用しての水無瀬散策が可能な九月というのは必然的に昭和四年しかないことになるわけだが、テキストを論じる上で現実の作者の事情を持ち込むことは避けるべきであろう。だが、もし昭和五年の出来事ならば、「をとゝし」という言葉を用いれば済むはずだという理屈も成り立つ(テキスト内にも「をとゝし」という言葉が使われている)。もちろん、「あるとし」とぼかしていること自体に記述者の巧妙な仕掛けがあるのだが。
- (27) 『御大札記念京都府伏見町誌』(昭和4・1、伏見町役場)、『明治ニュース事典 第四巻 明治21年—明治25年』(昭59・1、毎日コミュニケーションズ)および『京都府百年の年表7』に拠る。
- (28) 小竹即一編『電力百年史』(昭55・8、政教社)、『関西地方電気事業百年史』(昭62・10、関西地方電気事業百年史編纂委員会)、『京都府宇治郡誌』(大12・5、京都府宇治郡役所)、『京都府百年の年表7』に拠る。
- (29) 『青春物語』(昭8・8、中央公論社)によれば、谷崎は明治四十五年四月に京阪見物記(『朱雀日記』明45・4〜5「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」)を執筆するため、京都およびその近辺を散策している。その折に宇治にも足を運んでおり、川堤を歩きながら、宇治川水力発電所の建設工事を直接見ているのである。おそらく、谷崎は明治四十五年の時点で宇治付近にまだ電灯が引かれていなかったということ記憶していたのではなかったかと思われる。
- (30) (25)に同じ
- (31) (9)に同じ
- (32) ここでは(子供は好奇心が強い)という通念を持ち出し、そこから自分が幼くして「父」の話を理解できたことも決して

不自然なことではないと一般化する演繹法が使われていることに注意したい。

- (33) ただし、その「わたし」の質問がすべて書き込まれているとは断定できない。例えば、「左様でござります」という「男」の受け答えの言葉が書かれているにも関わらず、その前にあるべき「わたし」の言葉が書かれていない部分が二箇所ある。次に引用した部分にも、聞き手の言葉があつたのではないかと推測される。

三人の仲のよいことは親類ちゆうに知れわたつてをりましたから角のたつやうなことはできませぬのでさうかうするうちに又両方から近づいてしまひましてけつきよくお静のはからつたことが味善う行つたのでムりました。左様でござります、それはたしかに、お遊さんの心のおくへ遣入つてみましたら自分で自分にゆひまはしてゐた埒が外れてしまつたやうな気持ちのゆるみができまして妹の心中だてを憎まうとしても憎めないのでござりませう。

おそらく、ここにはへしかしお遊さんもさういふおしづさんの気持を憎からず思つたこととせう」といふような聞き手の言葉があつたものと考えられる。とすれば、「男」の物語を聞いた時の「わたし」の言葉は、この〈水無瀬見聞記〉を書く段階において部分的に省略されているということになるだろう。もちろん、省略された言葉は「男」の応答によって類推できるものであり、書き込む必要のないもののだが、それは逆説的には記述者の「わたし」がその時の自分の言葉を取捨選択し、意味のある質問だけを書き込んだということにもなる。

- (34) (17) に同じ

- (35) 『大和物語』の百四十八段「蘆刈」にある古歌。

- (36) 石原千秋『漱石の記号学』(平11・4、講談社)

〈付記〉本稿は平成八年十一月二十四日、駒澤大学国文学大会において口頭発表した原稿をもとに加筆したものである。『蘆刈』本文の引用は愛読愛蔵版『谷崎潤一郎全集 第十三卷』(昭57・5・25、中央公論社)に拠った。なお、本稿を執筆するにあたって、塩崎氏の調査から多くの示唆を与えられたことを付け加えておく。

(本学非常勤講師)